

内的モノローグ

II

——予備的考察・作品研究——

有 田 潤

解 説

本稿ではまず前回の要約と、前回分量超過で割愛した§ 11～12. を掲げ、次に、Th. マン『ヴァイマルのロッテ』の考察を試みたい。

前回の要約

- (1) i.M. は文芸学の、意識の流れは心理学の、体験話法は文法上の、概念・用語である。
- (2) 作家は意識の流れを模写するのではなく、作品（の1部）を意識の流れとして、意識の流れであるかのごとくに、構成し創作する。ここで作家の仕事は類似性の創造にある。
- (3) i.M. は文芸学的にみた表現形式、小説の1つのテクニクである。作家はこのテクニクを用いて意識の流れに類似するようにテキストを作成することができる。
- (4) 体験話法は自他の言・考を伝達する方式の1つで、直説法を用いる特殊な間接話法である。
- (5) 体験話法と一般の間接話法には一定の文法的制約がある。他方 i.M. という表現形式は、1人称・単数・直説法現在形に回帰する傾向を有するが、そのほかには格別の文法的制約を受けない。
- (6) このように i.M. は文法的に“自由”な点で直接引用文に似ている。したがって研究上意義があり、かつ困難なのはこの2つの識別である。
- (7) 体験話法は思考のみならず、口に出して話された発言の再現・提示手段でもありうる。
- (8) これに対して i.M. は内心の呟きの文字化・作品化であり、思考内容——意図、欲求、思索、連想、回想、幻想、妄想等——を文章化するだけである。そうでなければ、そもそも“内的”の語は意味をなさない。

(以上の要約は前稿の概念規定をいっそう徹底したものである。)

§ 11. 内的モノローグと“外界”

ここでいう外界とは、意識の外部に生ずるすべてを指す。i.M. は作者が登場人物の内面に住んで、その内面の動きを写し取る形にするわけであるから、外部とのかかわりは登場人物の内面に反映したかぎりにおいてのみ問題になる。しかしそのかかわりは千差万別であろう。「外出し、だれそれと会い、酒を飲んだ」という文は、主人公の妄想であっていいし、また身体をもってする実際の行為——そう解されることを作者が前提した文意——

であることを妨げない。この外界とのかかわりの度合いは作品全体、あるいは個々の部分の制作意図、傾向、総体的印象を決定する。

前記のマルティーニはシュニツラーの章で、外面の筋の展開は最小限に抑えられる、と書いている。また S. 664 では、M. フリッシュを説明するさいに、

内部と外部の境界、主観と客観の境界は脱落する。内的モノローグは、不透明な世界にいるバラバラな人間の言語になり、そこに残っているのは連想、飛躍、断片、瞬間だけである。

と述べている。

§ 12. i.M. の文体

(1) 特殊な対話形式

筆者は § 6. 「身近かな 1 例」で、相手なき“一方的対話”とでもいうべきものを指摘した。すなわち、相手方の発言は直接引用で書かれ、これに主人公の i.M. が対立するものであった。ここにいう特殊な対話形式の 1 つは、主人公が手紙を読みながら、1 行ごとに反応してゆく場合である。『エルゼ嬢』で彼女は母からの手紙に応答する。

[12] ‚Mein liebes Kind, Du kannst mir glauben, wie leid es mir tut, daß ich Dir in Deine schönen Ferienwochen‘ — Als wenn ich nicht immer Ferien hätt’, leider — ‚mit einer so unangenehmen Nachricht hineinplatze.‘ — Einen furchtbaren Stil schreibt Mama — ‚Aber nach reiflicher Überlegung bleibt mir wirklich nichts anderes übrig. Also, kurz und gut, die Sache mit Papa ist akut geworden. Ich weiß mir nicht zu raten, noch zu helfen.‘ — Wozu die vielen Worte? — ‚Es handelt sich um eine verhältnismäßig lächerliche Summe — dreißigtausend Gulden‘, lächerlich? — ‚die in drei Tagen herbeigeschafft sein müssen, sonst ist alles verloren.‘ Um Gottes willen, was heißt das?

「愛するエルゼ、どうか分かってちょうだい、悪いとおもっているのよ、貴女の折角の休暇を」 — 残念ながら、年中休暇みたいなものののにねえ — 「こないやな知らせでかきまわして」 — ママはひどい文章を書くものね — 「とっくり考えたすえなんだけど、これ以外にあたしには手がないの。あの、簡単にいうと、パパの件、差しせまってきたのよ。あたしには名案もないし、どうもできないわ」 — 余計な言葉が多過ぎる — 「金額は割合に小さな額—— 3 万グルデンよ」 小さな額? — 「3 日以内にこしらえなくちゃならないの、さもないと、万事休すだわ」 いったいどういうことなのかしら?

また『エルゼ嬢』の次の文例では、エルゼ、ツィッシ夫人、パウルの会話と、エルゼの内心が描きだされる。エルゼ以外の 2 人の発言はイタリック体で表記されている。

[13] „Wie, Else, Sie sind schon fertig zum Diner?“ — Warum sagt sie jetzt Diner und nicht Dinner. Nicht einmal konsequent ist sie. — „Wie Sie sehen, Frau Cissy.“ — „Du siehst wirklich entzückend aus, Else, ich hätte große Lust, dir den Hof zu machen.“ — „Erspar’ dir die Mühe, Paul, gib mir lieber eine Zigarette.“ — „Aber mit Wonne.“ — „Dank’ schön. Wie

ist das Single ausgefallen?“ — „*Frau Cissy hat mich dreimal hintereinander geschlagen.*“ — „*Er war nämlich zerstreut. Wissen Sie übrigens, Else, daß morgen der Kronprinz von Griechenland ankommt?*“ — Was kümmert mich der Kronprinz von Griechenland? „So, wirklich?“

「エルゼ、晚餐に出る身支度はできたの？」—彼女は、さっき英語でディナーといったのに、今度はなぜフランス語なのかしら。一貫してないのねえ。—「ご覧のとおりよ、ツィッシ夫人」

「君、ほんとに魅力的だぜ、エルゼ、君のお相手ができれば、ありがたいな」—「それには及ばないわ、パウル、それよりタバコ1本くれない？」—「喜んで」—「ありがとう。お二人の試合、いかがでした？」「ツィッシ夫人には立てつづけに3回負けちゃった」「彼は気もそぞろだったのよ。ところで、エルゼ、明日ギリシャの皇太子がここにご到着なのを知ってる？」

—ギリシャの皇太子があたしになんの関係があるんだ？「あら、そうなの？」

空想の中で相手の想念を勝手におもい描いて、それに反応することも多い。次例はエルゼがドルスダイ氏に借金を申し入れたあと、結果をいろいろと想像する1節である。自分が夕食に遅れているので、氏はそれを気にするはずだ。

[14] Herr von Dorsday sitzt gewiß auf Nadeln. Wo bleibt sie, denkt er sich. Hat sie sich am Ende umgebracht? Oder engagiert sie jemanden, daß er mich umbringt? Oder hetzt sie ihren Vetter Paul auf mich? Haben Sie keine Angst, Herr von Dorsday, ich bin keine so gefährliche Person. Ein kleines Luder bin ich, weiter nichts.

フォン・ドルスダイ氏は、さぞかしじりじりしているだろう。彼女はどこへいったんだ？と彼は考えるだろう。とうとう彼女は自殺したか？それとも彼女はだれかを雇ってあたしを殺させるかな？それとも従兄弟のパウルに、あたしを殺れとけしかけるか？ご心配には及びませんよ、フォン・ドルスダイさん、あたしはそんな危険な人物じゃない。ちょっとしたあばずれ、ただそれだけよ。

(2) カプリッチョ

i.M. の文体にはいくつかの特徴があるが、しばしば見られる著しいものの1つは、次々と繰りひろげられる想念のあいだに、必然的ないし論理的脈絡が全然ないか、あってもきわめて僅かだ、ということである。次の文例は『エルゼ嬢』のはじめの1節で、彼女はドルスダイ氏に借金話をどうもちだそうかと、考えあぐねている。いくつか口にされる人名は読者にはすでに紹介済みのものも、はじめてのものもあるが、この場の言及としてはすべて想念の断片にすぎず、相互に関連がない。論理と秩序を重んずる作風からは不安定な文体ということになるが、意識の内面は、とりわけ激情が荒れ狂うと論理的に完全な無政府状態になるから、i.M. はその混迷ぶりをさらけ出す手段になるであろう。この感じを一言でいえば、気まぐれ Launen, カプリッチョ capriccio であろうか。

[15] Ich muß Licht machen. Kühl wird es. Fenster zu. Vorhang herunter? — Überflüssig. Steht keiner auf dem Berg drüben mit einem Fernrohr. Schade. — Ich bekomme da eben einen Brief, Herr von Dorsday. — Nach dem Diner wäre es doch

vielleicht besser. Man ist in leichter Stimmung. Auch Dorsday — ich könnt' ja ein Glas Wein vorher trinken. Aber wenn die Sache vor dem Diner abgetan wäre, würde mir das Essen besser schmecken. Pudding à la merveille, fromage et fruits divers. Und wenn Herr von Dorsday nein sagt? — Oder wenn er gar frech wird? Ah nein, mit mir ist noch keiner frech gewesen. Das heißt, der Marineleutnant Brandl, aber es war nicht böse gemeint. — Ich bin wieder etwas schlanker geworden. Das steht mir gut. — Die Dämmerung starrt herein. Wie ein Gespenst starrt sie herein. Wie hundert Gespenster. Aus meiner Wiese herauf steigen die Gespenster. Wie weit ist Wien? Wie lange bin ich schon fort? Wie allein bin ich da? Ich habe keine Freundin, ich habe auch keinen Freund. Wo sind sie alle? Wen werd' ich heiraten? Wer heiratet die Tochter eines Defraudanten? — Eben erhalte ich einen Brief, Herr von Dorsday. — ‚Aber es ist doch gar nicht der Rede wert, Fräulein Else, gestern erst habe ich einen Rembrandt verkauft, Sie beschämen mich, Fräulein Else.‘ Und jetzt reißt er ein Blatt aus seinem Scheckbuch und unterschreibt mit seiner goldenen Füllfeder; und morgen früh fahr' ich mit dem Scheck nach Wien. Jedenfalls; auch ohne Scheck. Ich bleibe nicht mehr hier. Ich könnte ja gar nicht, ich dürfte ja gar nicht. Ich lebe hier als elegante junge Dame, und Papa steht mit seinem Fuß im Grab — nein im Kriminal. Das vorletzte Paar Seidenstrümpfe. Den kleinen Riß grad' unterm Knie merkt niemand. Niemand? Wer weiß. Nicht frivol sein, Else. — Bertha ist einfach ein Luder. Aber ist die Christine um ein Haar besser? Ihr künftiger Mann kann sich freuen. Mama war gewiß immer eine treue Gattin. Ich werde nicht treu sein. Ich bin hochgemut, aber ich werde nicht treu sein.

あかりを点けなくては。冷えてくる。窓をしめる。カーテンを下ろす? — 余計だ。だれも丘の上から望遠鏡で覗いているわけじゃない。惜しいわ。— フォン・ドルスダイさん、じつは手紙が来たんです。— 食後のほうがいいかな。気分が軽くなるからねえ。ドルスダイだってそう。— その前にワインを1杯やるか。だが、食事前にことがすんだら、食事はずっとおいしくなるだろうな。プディング・ア・ラ・メルヴェューユ、チーズ、果物取りあわせ。で、フォン・ドルスダイさんがノーといったら? — あるいは、彼が厚かましく出たら? あ、いやいや、誰もあたしに厚かましくした男はいない。海軍少尉のブランドルはちょっと、けれど別に悪気はなかった。— あたしはまた少し痩せちゃった。そのほうが似合うけれど。— 夕闇が窓から忍びこんでくるわ。まるで幽霊みたいに忍びこむ。幽霊がうんというみたいだ。あたしの牧草地から幽霊どもがふらふら登ってくる。ウィーンはどのくらい遠かったかな? ウィーンを離れてあたしはもうどのくらいになるんだろう? ほんとうにひとりぼっち? 女も男も友達はいない。みんなどこにいるのかな? あたしはだれと結婚するんだろう? 詐欺師の娘と誰が結婚するもんか? — 今手紙を受けとったところなんです、フォン・ドルスダイさん。— 「問題ありませんよ、エルゼ嬢、昨日レンブラントを1枚売ったところなんです。恐縮ですが、エルゼ嬢」そして彼は小切手帳から1枚切りとって金ペンの万年筆でサインする。明朝小切手をもってウィーンへもどろう。小切手なしでもどうせもどるんだわ。ここにもう逗留は

しない。逗留できないし、してはいけないんだわ。ここではあたしは上品な若いレディーなのだし、パパは死にかけてる。—いや監獄行きだ。あと1足しかない絹の靴下。膝のすぐ下にある小さなほつれにはだれも気づかない。だれも？ そんなこと分かるもんか。蓮っ葉にならないことだ、エルゼ。—ベルタはまったくの尻軽女だ。クリスティーネはちょっとましかな？ 彼女の夫になる男はいい目を見ることだ。ママはきつといつも貞淑な妻だったんだ。あたしは貞淑はごめん。横柄だけど、貞淑にはならない。

(3) 内面露呈

人前ではとうてい口にできないようなことも、心の中ではだれ憚ることなくいってみるのが人間であろう。こういう恥ずべき心の動きも、i.M. という創作形式なら自由に描きだすことができよう。次例はグストルがパン屋に軽侮されたあと、だれかに見られなかったか、とびくびくしながら、殺したいほどの憎しみをたぎらす1節である。

[16] Warum hab' ich's denn nicht gleich getan? ... Ich hab's ja nicht können ... er hat ja den Griff nicht auslassen, und er ist zehnmal stärker als ich ... Wenn ich noch ein Wort gesagt hätt', hätt' er mir wirklich den Säbel zerbrochen ... Ich muß ja noch froh sein, daß er nicht laut geredet hat! Wenn's ein Mensch gehört hätt', so müß' ich mich ja *stante pede* erschießen ... Vielleicht ist es doch ein Traum gewesen ... Warum schaut mich denn der Herr dort an der Säule so an? — hat am End' was gehört? ... Ich werd' ihn fragen ... Fragen? — Ich bin ja verrückt! — Wie schau' ich denn aus? — Merkt man mir was an? — Ich muß ganz blaß sein. — Wo ist der Hund? ... Ich muß ihn umbringen!
俺はなぜすぐにやらなかったのか?... できなかったのだ... 彼はサーベルの取っ手を手放さなかった、それに彼は俺の十倍も強いからな... 俺が一言でも口をきこうものなら、ほんとうに俺のサーベルをへし折つただろう... 彼が大声で喋らなかったのはもっつけの幸いだ! だれかがそれを聞いたら、俺はすぐさまピストルで自殺しなくちゃなるまい... ひょっとしてこれは夢だったのか... あの柱のところにいる殿方はなぜそんなに俺をみつめるんだ? — どうやら彼はなにか聞いたんだな? ... 彼にたずねてみようか... たずねる? —俺は頭がおかしくなった! —俺はどんなふうに見えるのかな? —なにか気づかれたかな? —俺は真っ青に違いない——野郎どこへいきやがった? ... 奴をばらしてやる!...

『エルゼ嬢』で、彼女は父のために男に身を売ることを空想する。

[17] Die edle Tochter verkauft sich für den geliebten Vater und hat am End' noch ein Vergnügen davon. Pfui Teufel! Nein, Paul, auch für dreißigtausend kannst du von mir nichts haben. Niemand. Aber für eine Million? — Für ein Palais? Für eine Perlen-schnur? Wenn ich einmal heirate, werde ich es wahrscheinlich billiger tun. Ist es denn gar so schlimm? Die Fanny hat sich am Ende auch verkauft. Sie hat mir selber gesagt, daß sie sich vor ihrem Manne graut. Nun, wie wär's, Papa, wenn ich mich heute abend versteigerte? Um dich vor dem Zuchthaus zu retten. Sensation —!

身分のある娘が愛する父のために身を売り、それをけっこう楽しみにする。うわあ、いやだ。だめよ、パウル、3万グルデン出したって、貴方のものにはならない。だれだってだめ。でも百万だったら？ 一大邸宅なら？ 眞珠の首飾りなら？ あたしが結婚したら、たぶんもっと安くするわ。これ、そんなにひどいことかしら？ ファニーもけっきよくは身を売った。彼女、あたしにいったわ、亭主が怖いって。さあ、パパ、あたしが今晚自分をセリにかけたら、どうかしら？ パパを監獄へ行かせないためによ。大騒ぎでしょうねえー！

女は、自分が美しいとおもっても、それをあからさまに口に出すのはふつう憚るものだが、他人に聞かれない内面ではいかなる自己陶醉 (Narzißmus) も大いに可能となる。『エルゼ嬢』で彼女が自分の美しさを口にする箇所がある。

[18] Aber ich? Reiche Partie. Oh, wenn ich es darauf anlegte! Ich bin heute wirklich schön. Das macht wahrscheinlich die Aufregung. Für wen bin ich schön? Wäre ich froher, wenn Fred hier wäre? Ach, Fred ist im Grunde nichts für mich. Kein Filou! Aber ich nähme ihn, wenn er Geld hätte.

でもあたしはどうなるの？ わりのいい結婚ね。そう、その気になって努力すれば！ あたし、今日はとても綺麗よ。きっと目立つわ。綺麗って、だれのため？ フレートがここにいたら、あたしもっと嬉しいかしら？ いいや、フレートはやっぱり問題じゃない。女をぞくぞくさせないもの。でも、お金があったら彼でもいいわ。

『少尉グストル』でパン屋が死んだと聞かされて、大喜びするくだりなど、あまり褒めた言葉ではあるまい。

[19] Ich glaub', so froh bin ich in meinem ganzen Leben nicht gewesen... Tot ist er — tot ist er! Keiner weiß was, und nichts ist g'scheh'n! — Und das Mordsglück, daß ich in das Kaffeehaus gegangen bin... sonst hätt' ich mich ja ganz umsonst erschossen — es ist doch wie eine Fügung des Schicksals.

わが生涯にこんな嬉しいことはなかったぜ... やつは死んだ——やつは死んだ！誰もなにも知らないし、なにもなかったんだ！——俺がコーヒーショップに来たなんて、こりゃついてたな... さもなけりゃ、まったく無駄な自殺ということになったからな——宿命の果て、なんてことになったろうさ。

§ 13. 『ヴァイマルのロッテ』

この作品が i.M. を含むとされるのは、とりわけ第7章ゆえであるとおもう。

さて1772年ヴェッツラーで、19歳のロッテは4歳年長のゲーテと出会う。その2年後の

原文：Thomas Mann, Lotte in Weimar, S. Fischer Verlag, 1982.

英訳：Thomas Mann, Lotte in Weimar, Penguin Modern Classics, 1968.

仏訳：Thomas Mann, Lotte à Weimar, Gallimard, 1945.

伊訳：Thomas Mann, Carlotta a Weimar, Arnoldo Mondadori, Milano, 1993.

1774年に『ヴェーアター』が発表され、ロッテは運命的に世界文学の人となる（この年ロッテは最初の子を生む）。歳月が流れ、ロッテは11人の子の母となる。44年後の1816年彼女は娘と侍女をつれて、ドイツのアテーナイ——ヴァイマル——を訪れる。表向きの目的は妹夫婦宅訪問であった。婚約中のロッテと63歳の寡婦ロッテ。文豪との再会。文学史上まれなこの事件はTh. マンでなくとも、作家ならば創作意欲をかき立てられるテーマであるに違いない。

小説『ヴァイマルのロッテ』は、いわば2幕からなる。前半1～6章ではロッテが舞台にとどまり、さまざまな人物が彼女を訪れる形式をとる。後半7章以後はゲーテが中心人物になる。

前半では、ほとんどがロッテと他の人物との対話で構成される。対話といっても登場人物は滔々と何ページにもわたって弁舌をふるい、60ページ以上の第5章のごときは、すべてショーペンハウアーの妹アデーレの談話で埋められる。つまり作者はこういう形で自分のゲーテ論、人間論をくりひろげ、性格と心理、倫理道德、天才、学問、親子関係、家系と結婚、ナポレオン戦争、文学、芸術、神学、社交、趣味、手芸、その他多方面の見解と知識を展開する。その意味で、対話をする人物の発言の多くが、モノローグだといえないこともない。しかしそれは“内的”とはいえないし、一定の形式のテキストをi.M.と呼ぶのであるから、ここでは表現形式に着目して限定的に考える。

[20] »... um Vergebung zu bitten für noch eine einzige Frage... Vierundvierzig Jahre! Und Frau Hofrätin haben den Herrn Geheimen Rat in diesen vierundvierzig Jahren nicht wiedergesehen?«

»So ist es, mein Freund«, antwortete sie. »Ich kenne den jungen Rechtspraktikanten Doktor Goethe aus der Gewandsgasse zu Wetzlar. Den Weimariischen Staatsminister, den großen Dichter Deutschlands habe ich nie mit Augen gesehen.« (S. 20)

「もう1つだけおたずねしてよろしいでしょうか... 44年とおっしゃいましたが、宮中顧問官夫人はこの44年間に枢密顧問官様にはお会いにならなかったのをごさいますね」

「そのとおりですわ、貴方」と彼女は答えた。「わたくしが存じあげているのはヴェッツラーのゲヴァント小路の司法実習生ドクター・ゲーテです。ヴァイマルの宰相、ドイツの大詩人にはまだ拝眉の榮に浴しておりません」

このように、ロッテと訪問客やホテルの支配人とのあいだに次々と対話がくり広げられるなかで、話し相手が退場し、ロッテひとりになる場面がある。このとき作者は次のように外面の描写に終始することもある。

[21] Da Madame Kestner ihren schwarzen Umhang abgelegt hatte, stand sie in einem Kleide da, ebenso weiß wie das freilich gesellschaftlichere, das man ihr vorzeigte. Sie trug bei wärmerer Jahreszeit (und die Witterung war noch sommerlich) aus eigentümlicher Liebhaberei stets weiße Kleider. Dasjenige aber in der Hand ihrer Tochter wies blaßrote Schleifen auf. (S. 26)

ケストナー夫人は黒のケープを肩から離して、白い服を着て立っていた。娘が差しだしたもつと改まった服と同じように白かった。彼女は温暖な季節には(時候はまだ夏めいていた)独特の好みからいつも白い服をまとっていた。ところで、娘が手にしている服には淡紅色のリボンがついていた。

けれども、しばしばロッテの心の中に分けいり、その表現形式も場合によって i.M. に移る。つまり対話と対話の中間が i.M. の場となる。さて、この作品中 i.M. が最初に現われるのは、筆者のみるかぎり第 2 章のはじめである。

第 2 章は Charlotte fand lange ... という過去形の叙述文ではじまる。以下約 30 行は 4 段に分けられるであろう。(S. 28)

第 1 段—Charlotte から gefiel. まで。過去形の叙述文で、ロッテは 3 人称扱い。

第 2 段—Was から Alterswürde. まで。ここで現在形の i.M. に移行する。

第 3 段—Man から Streich. まで。過去形の体験話法。ロッテは代名詞 man で表わされる。

第 4 段—Charlotte から hätten. まで。過去形の叙述文にもどる。

——第 1 段——

これは叙述文であって、ロッテは 3 人称の sie。

[22] Charlotte fand lange die Ruhe nicht, die — sie wohl nicht einmal aufrichtig suchte. Zwar verhüllte sie, nachdem sie die oberen Kleider abgelegt und sich, mit einem Plaid bedeckt, auf einem der Betten unter dem kleinen Mullhimmel ausgestreckt hatte, ihre Augen gegen die Helligkeit der Fenster, die ohne dunklere Vorhänge waren, mit einem Schnupftuch und hielt darunter die Lider geschlossen. Dabei aber trachtete sie nach ihren Gedanken, die ihr Herz klopfen machten, mehr als nach dem vernünftigerweise wünschenswerten Schlummer, und dies um so entschiedener, als sie diese Unweisheit als jugendlich, als Beweis und Merkmal innerster Unverwüstlichkeit, Unveränderlichkeit durch die Jahre empfand und sich mit heimlichem Lächeln darin gefiel.

シャルロッテはしばらく眠れなかった。もっとも本気で眠ろうとしなかったが。彼女は、上着を脱ぎチェックの肩掛けを引っ掛け、小さなモスリン天蓋の下のベッドで身を伸ばすと、遮光カーテンのない窓が明るいのでハンカチで眼を覆って、その下で瞼を閉じてはいた。しかしそれでも、当然望ましいはずのまどろみを求めるというよりは、心を弾ませる自分の考えを追いかけていた。この愚かさを若さと感じ、年来の心の瑞々しさ、心の不変の証拠、印しだと感じて、ひそかに北叟笑みながらそれを得意におもうにつけて、考えを追うこの気持ちはいっそうはっきりしたきた。

この段落ではロッテを外面から描写しているが、Dabei aber... あたりから内面にはいる。ただし 3 人称扱いに変わりはない。

——第 2 段——

ここで手紙の引用を含む短い叙述文——副文——から主文の i.M. へ移行するが、これが

すこぶる微妙だとおもう。ロッテはまず 3 人称 *ihr* で登場し、つづく *ist* 以下の主文が *i.M.* であって、代名詞は *wir*, 時称は現在形になる。*i.M.* はこの段の終わりまでつづく。ロッテは 1 人称の「わたしたち」に含まれる。

[23] Was jemand ihr einst geschrieben, auf einem Abschiedszettel: »Und ich, liebe Lotte, bin glücklich, in Ihren Augen zu lesen, Sie glauben, ich werde mich nie verändern.«, ist der Glaube unserer Jugend, von dem wir im Grunde niemals lassen, und daß er Stich gehalten habe, daß wir immer dieselben geblieben, daß Altwerden ein Körperlich-Äußerliches sei, und nichts vermöge über die Beständigkeit unseres Innersten, dieses närrischen, durch die Jahrzehnte hindurchgeführten Ich, ist eine Beobachtung, die anzustellen unseren höheren Tagen nicht mißfällt, — sie ist das heiterverschämte Geheimnis unserer Alterswürde.

かつて或の人が彼女に別れの手紙で書いたこと：「親愛なロッテ、僕の心が変わらないと貴女が信じてくださっていることを、貴女の眼から見てとれるので、僕は幸せです」これはわたしたちの青春時代の信念で、わたしたちは根本において、けっしてこれから離れることはない。そして、この信念が確固たるものであったこと、わたしたちはいつも同一不変だったし、老いは肉体的な外面のもので、わたしたちの内面の永続には、なん十年ものあいだ引っぱってきたこの愚直な自我の永続には、少しも影響を与えなかったこと、こういう観察をするのは老いたわたしたちにとって不満を覚えるものではない。それはわたしたちの年の功による、朗らかな気恥ずかしい心の秘密なのだ。

ここで注目されるのは、ゲーテが「彼女に *ihr*」書いたという箇所である。この「彼女」はむろん「昔のロッテ」であり、それは同時に現在の「私ロッテ」にほかならない。ゲーテに愛されたロッテは過去の実在であり、その過去の自分を客観的に「彼女」と呼ぶこともできる。しかも今その「彼女」は当地ヴァイマルの「象屋ホテル」にいる。この同一性があるから、つづく文の 1 人称複数形が活きる。*i.M.* に移ってからのこの「わたしたち」はだれを指すのか。ロッテやゲーテのほかに、当時の青年男女一般も含まれるのかもしれない。このくだりは英訳では、

[24] In a farewell letter Someone had written: „And I, dear Lotte, rejoice to read in your eyes that you believe I shall never change.“ There it is, the faith of our youth; we never, at bottom, relinquish it,

となっている。原文の副文・主文を 2 つの独立文に変え、かつ *ihr* を無視している。英文としてはこのほうが通りがいいのかもしれないが、これでは「彼女」から「わたしたち」への移行過程は現われないであろう。ただし「或る人」を Someone と大文字にしたのは意味ありげでおもしろい。この箇所の仏訳は次のとおり。

[25] Ce que jadis, dans un billet d'adieu, quelqu'un lui avait écrit: « . . . », est une croyance de notre jeunesse,

すなわち、副文・主文の構造も lui 「彼女に」もそのまま移されていて、きちんとした文章になっているとおもう。こうみると、英訳の扱いが最適といえるかどうか。このイタリア語訳は次のとおり。

[26] Ciò che un giorno le avevano scritto in un biglietto di congedo: «...», è la fede della nostra giovinezza,

le 「彼女に」は正しく訳されていて問題ないが、手紙の書き手が「或る人」ではなく、複数の主語——助動詞 avevano で示され、「人々」に相当——になっているのは適切でないとおもう。「或る人」は qualcuno といえる。イタリア語では man や on を 3 人称定形の複数形で表わせるが、ここは単数形でないと合わないであろう。

——第 3 段落——

更に興味があるのは、次の体験話法文であろう。

[27] Man war eine sogenannte alte Frau, nannte sich spöttisch auch selber so und reiste mit einer neunundzwanzigjährigen Tochter, die noch dazu das neunte Kind war, das man dem Gatten geboren. Aber man lag hier und hatte Herzklopfen genau wie als Schulmädel vor einem tollen Streich.

今この部分を (a) 3 人称・過去形のまま、(b) 1 人称・現在形、の 2 とおりに訳しわけてみよう。

(a) 3 人称・過去形 (原文に近く)

〔彼女は〕いわゆるお婆さんであったし自分でも自嘲的にそう呼んでいた。〔彼女は〕29 歳の娘をつれて旅をしていた。しかもそれは〔彼女が〕夫との間に生んだ 9 番目の子であった。しかし〔彼女は〕ここに横たわり、まるでなにかを仕でかそうとする女学生のように胸を弾ませていた。

(b) 1 人称・現在形

あたしはいわゆるお婆さんで、自分でも自嘲的にそう呼んでいる。あたしは 29 歳の娘をつれて旅をしていて、しかもそれは、あたしが夫との間に生んだ 9 番目の子なのだ。しかしあたしはここに横たわり、まるでなにかを仕でかそうとする女学生のように胸を弾ませている。

この Man war eine sogenannte alte Frau. の Man は内容からみて明らかに sie すなわち ロッテ自身を指し、定形は体験話法の多くの場合のように直説法過去形になっている。ただし man は訳しにくい。「人々は」ではありえないし「人は」もおかしい。「この人は」か「彼女は」であろう。日本語では省くこともできるが、左側訳文では〔彼女〕としてみた。日本語の語感では (b) のほうが親しみやすいとおもうが、どうであろう。

この体験話法文で注目したいのは、これが同時に i.M. であろう、ということである。体験話法は第 1 回で指摘したように、必ずしもすべてが思考表現ではなく、口に出していわれたことでもありうるが、内心のものであることが確実であるなら、同時に i.M. になりうるはずである。体験話法による i.M. の例はまた後に挙げる。

この部分の英訳では最初の Man のみ This とし、以下は she とする。

[28] This was an old woman, so called and daily mocking herself as such, and journeying with a daughter of nine-and-twenty, the ninth child she had borne to her husband. Yet here she lay, and her heart throbbed like that of a schoolgirl caught in some mad prank.

同所の仏訳は興味深い。フランス語には man とほぼ完全に一致する on があるので、英訳とは語感が違ってくる（仏訳が娘の年齢を 27 歳としているのは別の典拠によるのかもしれないが、たぶん誤記であろう）。すなわち、

[29] On était une soi-disant vieille femme, on se désignait soi-même ainsi avec ironie, et l'on voyageait en compagnie d'une fille de vingt-sept, laquelle, par surcroît, se trouvait être le neuvième enfant qu'on avait donné à son mari. Tout cela n'empêchait pas d'être étendue ici, le coeur battant comme une pensionnaire sur le point de commettre une folie.

のように、man はすべて on で処理される。次にこの箇所のイタリア語訳を掲げる。

[30] Era una cosiddetta vecchia signora, si definiva ella stessa così, e viaggiava con una figlia di ventinove anni, che era per di più la nona delle creature donate al marito. Ma ecco che lì distesa sentiva il cuore battere come una ragazzina pronta a una grossa birichinata.

定形からみて主語は 3 人称単数形の代名詞であり、一致の関係からドイツ語の sie「彼女」に相当する。イタリア語にも man, on に類似する代名詞がないわけではないが、ここでは用いられていない。

もう 1 点注目すべきは時称である。ドイツ語・英語の過去形は 1 つであるが、フランス語ではこれに応ずるのに、半過去形と単純過去形のどちらかを選ぶことができる。ところが体験話法（自由間接話法 style indirect libre）の場合は格別で、時称が過去の場合、定形には半過去形が原則であるらしい。これはイタリア語でも同様で、上記の仏・伊訳はこの箇所の定形をすべて半過去形にしている。

war = était = era nannte = désignait = definiva reiste = voyageait = viaggiava war = se
trouvait être = era geboren (hatte) = avait donné (= donate) lag = n'empêchait pas d'être
étendue (= distesa) hatte (= battant) = sentiva

単純過去形（＝伊：遠過去形）は現在から過去を眺める語感のものであり、半過去形は過去に立場を移して、登場人物（または立言者自身）の“現在”を描く感じになるといえるから、時称が過去の場合、フランス語・イタリア語の体験話法では半過去形がより適するのであろう。したがってこの半過去形はドイツ語の体験話法を検出する 1 つの補助手段になるかもしれない。

備考：体験話法は日本語にもないことはないが、近代ヨーロッパ文学の手法なので、訳し方の問題はまだ十分論じられていないようにおもわれる。この問題はすでに関口氏によって提起

され（『ドイツ語学講話』），また保坂宗重教授が多数の論文で詳細に論じておられる。

——第4段落——

体験話法文のあと、再び過去形の叙述文に移る。

[31] Charlotte stellte sich Betrachter vor, die das reizend gefunden hätten.

シャルロッテは、これを魅力的だとおもってくれそうな観察者をおもい描いた。

仏訳のほうも時称を単純過去形にもどして、体験話法の終了のマークにする。

[32] Charlotte imagina des spectateurs qui auraient jugé la chose charmante.

ただしイタリア語訳が *Carlotta imaginava...* と半過去形にしているのは、ドイツ語原文の *stellte sich... vor* の解釈によるものとおもわれる。

ロッテの i.M. は対話の相手が眼前にいるときにも文章化されることがある（6章）。アデーレが辞去したあと、ゲーテの子息アウグストが招じいれられる。ロッテは、わが子でもありえたこの青年の若さを前にして、自分の老いと青春に思いをめぐらす。ここに引く文例は文脈からいって明らかにロッテの感慨である。ではその表現形式はどうか。

[33] Ach, die Zeit — und wir, ihre Kinder! Wir welkten in ihr und stiegen hinab, aber Leben und Jugend waren allezeit oben, das Leben war immer jung, immer war Jugend am Leben, mit uns und neben uns Abgelebten: wir waren noch zusammen mit ihr in derselben Zeit, die noch unsere und schon ihre Zeit war, konnten sie noch anschauen, ihr noch die runzellose Stirn küssen, der Wiederkehr unserer Jugend, aus uns geboren...

(S. 206)

ああ、時の流れというもの——わたしたちは、時の子どもなのだ！ わたしたちは時の中で凋み、下へ落ちてゆく。しかし生と若さはいつも高きにある。生は常に若く、若さは常に、わたしたちと共に、老いたわたしたちの傍らで生きる。共通の時間がまだわたしたちのものであり、しかもすでに若さのものでもある間は、わたしたちは若さと共にある。わたしたちは今なお若さを打ちながめ、その皺のない額に口づけすることができる。わたしたちから生まれた、わたしたちの若さの再来に口づけすることが。

過去形で書かれているが、現在形で訳した。過去の事実の叙述ではなく、普遍的な想念をつづるものだからである。その意味でこの過去形は、ギリシャ語文法でいう *gnomisch* 「格言的」な語法をおもわせる。たとえば“人間は生物である”は時間を超えて通用すると見なされる立言であるが、しかし前後の文脈に合わせて“人間は生物であった”ということもできよう。この1節の過去形はこのように解することができるのではないか。ではこの過去形はどこから来たのであろう。ここにいたる状況とロッテの思考は過去形で述べられているから、その続きで過去形を用いたのであろうが、情緒的なはじめの1行にも見られるように、ここは体験話法と解すべきであらう。では「われわれ」とはだれか？ ここでは、ロッテの立場からみた人間一般、少なくとも老人たちであり、しかも表現の上では

作者自身が重ねあわされているのではなからうか。いずれにせよ、この箇所は体験話法の形式を用いたロッテのi.M.であるとともう。

§ 14. 後 半

前記のとおり、この小説がi.M.の作品の1例にされるのは主として第7章あるがゆえであろう。第6章の末尾でゲーテの息子アウグストは、父の催すささやかなパーティにロッテが招待されている旨を告げる。読者は「いよいよ再会!」と期待する。しかし、ここまでほとんど対話形式で進んできた小説は、第7章で一気にゲーテその人の長大なi.M.に移り、ロッテは一時姿を消す。この転換は何を意味するのであろう。

第7章はこのようにはじまる。

[34] Oh, daß es schwindet! Daß das heitere Gesicht der Tiefe sich endigt, schleunig, wie auf den Wink eines launisch gewährenden und entziehenden Dämons, in nichts zerfließt und ich emportauche! Es war so reizend! Und nun, was ist? Wo kommst du zu dir? Jena? Berka? Tennstedt? Nein, das ist die Weimarer Steppdecke, seiden, die heimische Wandbespannung, der Klingelzug (S. 259)

おお、消えてゆくぞ、深淵の朗らかな相好が終わる、気まぐれに与えては取りあげる魔神の合図に應えるかのように、その相好は溶けてなくなり、俺はぽっかり浮かびでる! えらく魅力的だった! で今度はなんだ? お前はどこで自分に戻ったのだ? イェーナか? ベルカか? テンシュテットか? いや、これはヴァイマルの刺子の掛け布団だ。絹のだ。わが家の壁布だ。呼鈴のひもだ...

一見して、あたかもファウストの独白を聞くおもしろいもの、まことに調子の高い文章であり、ゲーテ自身の心の呟きとしては恰好のものというべきであろう。

ロッテにとって44年前の「あの方」との出会いは、娘時代の大事件であった。しかしゲーテの側から見れば、これは多くの女性遍歴の一齣——エチュード——にすぎない。一方、母としての務めを終え、思い出に生きる女ロッテの心には、今もなお「あの事」がやはり大きな輝きであるとともに、また重い石ころである。ゲーテもそれを忘れたわけではない。しかし彼はその出来事を40年以上も前に作品化し客観化・対象化した。今や彼はヴェーアターではなく、天才、文豪、詩人、科学者、劇場監督であるのみならず、小国ながら権力の座にいる宰相である。彼は友人、同業者、協力者でありライバルでもあった故人シラーを追想する一方、創作活動、芸術、著述、思想、行政、金銭問題に心を配らねばならない現役の男なのである。作者マンは一切の前置きを抜きに、第7章をゲーテの内面の呟きではじめる。前章までつねに幕の蔭にいた人物がいきなり正面に躍りでて、突如広大な文学生活を語る。そこではロッテはしばらく横に押しのけられ、気の毒なほど微小な存在になってしまう。『ファウスト』の宇宙的思想、屈折した創作の内面にロッテの入りこむ余地はあるまい。ゲーテは息子アウグストにむかって、ロッテのヴァイマル来訪を迷惑がってみせる。

[35] Die Vergangenheit verschwört sich mit der Narrheit gegen mich, um Trouble und Unordnung zu stiften. Konnt' sie sich's nicht verkneifen, die Alte, und mir's nicht ersparen? (S. 336)

過去の奴が愚かにもわしに反逆して、面倒と混乱のタネを蒔くのだ。彼女は、あの婆さんは、憤り深くして、わしを目こぼしできなかったのかねえ。

作者はこの第7章を評論の形式にすることもできたろう。しかし小説の1部に取りこむことで、はるかにより自由な——悪くいえば、客観的な裏付けにあまり気をくばらないですむ(ただし実際にはかなり入念な考証に基づくのであろうか)——表現を駆使することができた。しかしまたこの部分は、相手が誰であろうと、対話するには内容があまりに高度すぎる。ギリシャ神話やライブニッツ哲学を知らなければよく分からないような談義などは、“友人”との44年ぶりの再会の場にはふさわしくない。i.M.の形式はその意味でも必然的であったろう。

この小説はロッテのゲーテとの再会を主題とするかにみえる。しかしこの7章以外のすべてを切りすててもマンの制作意図の半ばは生きるのではなかろうか。ロッテのヴァイマル訪問は、マンがゲーテを論ずるための、ゲーテ論を通じてドイツとドイツ人を論じ、ナチ批判まで展開するための、舞台装置であり、極言すれば付けたしだとさえいえる。それほどこの章は光彩陸離たる、マンによるゲーテ幻視、ドイツ論であるようにみえる。なお小さな事実を1つ指摘しておきたい。この小説は9章からなり、各章の冒頭には、

Erstes Kapitel, Zweites Kapitel,

のように書かれているが、この7章だけは Das siebente Kapitel と冠詞づきである。これはどう解すべきなのか。(参照: Peter de Mendelssohn, Nachbemerungen, S. 440)

第8章はゲーテが主催する午餐会の場である。ロッテ母子、ゲーテの息子アウグスト、ロッテの妹夫婦、その他数名が招待される。主人側がほとんどひとりで座もちをし、客たちは聞き役にまわる。話題は必ずしもロッテの興味を引くものではない。昔の“友人”との再会はきわめて社交的な、気疲れのする、したがってロッテにとっては、錯綜した感情に苛まれるものとなった。わたしは何のためにヴァイマルにきたのか?

作者はゲーテの口をかりて、婉曲な表現でナチのユダヤ人迫害にも言及する。こういう問題点はマン研究者にとって重要であろうが、ロッテがそれで心を動かされたようには描かれていない。前章のゲーテ論に比べると、ここはロッテと文豪を再会させるための場面設定であるといっていいいかもしれない。しかもロッテは快々として楽しまない。

もっともこの章に i.M. として注目される箇所がないわけではない。それは章の終わり近くにある。午餐会がお開きになり、ロッテと娘、リーデル夫妻の4人が馬車で家路につく。リーデル夫妻の会話について、ロッテの内心の呟きが>...<で記される。

[36] »Er ist ein großer und guter Mensch«, sagte Amalie Ridel, und ihr Mann bestätigte: »Das ist er.« Charlotte dachte oder träumte: »Er ist groß, und ihr seid gut. Aber ich bin

auch gut, so recht von Herzen gut und will es sein. Denn nur gute Menschen wissen die Größe zu schätzen. Die Chinesen, wie sie da hüpfen und zirpen unter ihren Glockendächern, sind alberne, böse Menschen.<

Laut sagte sie zu Dr. Ridel:

».....«

(S. 391)

「彼(ゲーテ)は偉大な善良な人間ですわ」とアマーリエ・リーデルがいい、彼女の夫は「そのとおりだ」と断言した。

シャルロッテはこんなふう考えたか、あるいは夢をみていた。

<彼は偉大だし、あなたがたは善良だ。けれどもあたしだって善良、心の底から善良で、そうありたいと願っている。善良な人間だけが人の偉大さを評価できるのだから。鐘楼の下で跳びはねたり囁いたりする支那人は頓馬で悪い人間なのだ>

ロッテはリーデル博士にむかって声に出していった。

「.....」

>Er ist ... Menschen.<の箇所がロッテの内心であることは, dachte oder träumte. からも, またつづく地の文が Laut sagte sie ... と書かれているのでも明瞭である。ところで筆者はこれを i.M. と考えるが, 引用符がついており, 直接引用と解しても誤りとはいえない。しかし作者は, 一般の引用には »....« をつけるのに, ここでは符号を変えて>....<と表記している。この事実は作者がなんらかの区別——心の眩き——を暗示するためとみていいであろう。先に i.M. の 1 つの問題点は直接引用との類似だといったが, これなどはその 1 例になるとおもわれる。

翻訳をみると, 英訳と仏訳は一般の引用文と区別をしないが, 伊訳は独文を尊重してこの部分の引用符号を変えている。i.M. の問題は表記上は符号の用法として現われる。

第 9 章。作者は午餐会のときとは違って, 後日, 観劇後の馬車のなかでロッテとゲーテをふたりだけで会わせる。44 年前の出来事と, その後の感情の総決算とでもいうべき瞬間であった。ほかに人がいないのだから, 話題は個人的な問題に終始する。作者の織りなす言葉の綾の微妙さは見事であるが, 要するに感情を論理化するレトリックにみえる。一度勝負のついた将棋の駒の並べなおしといった感じで, われわれの問題には直接の関係はないであろう。

§ 15. 『ヴァイマルのロッテ』の特質

i.M. の角度からこの作品をみた場合, 2 つの面があるとおもう。第 1. 構造は全体としては対話形式であるから, シュニッツラーの 2 作のような, 登場人物の想念のテキスト化からなる小説とは別種のものだ, ということである。しかし第 2 に, 本作品の最も重要な部分と考えられる第 7 章 (Das siebente Kapitel!) においては, 前述したとおり i.M. の形式を取る必然性が濃厚であって, その意味で, これを i.M. の代表作の 1 つとして数えることに異論はないに違いない。

Der innere Monolog

II

ARITA Jun

- (1) Der i. M. kann im wörtlichen Sinne gar kein Dialog sein, wir gewinnen aber manchmal auch in dem i. M. den Eindruck, daß es eine Art Dialog gibt, in dem Dialogsprecher zu sehen sind. Einen solchen Dialog könnte man als „einseitigen Dialog“ bezeichnen.
- (2) Was den Stil des i. M.s betrifft, so kann man einige Eigentümlichkeiten hervorheben: Inkonsequenz der Denkweise, Launen, Enthüllung des Inneren usw.
- (3) Als nächstes kommt Thomas Manns „Lotte in Weimar“. Diesen Roman zählt man oft zu den einen i. M. enthaltenden literarischen Werken, wahrscheinlich, so glaubt der Verfasser, wegen seines 7. Kapitels.
- (4) Der Roman besteht sozusagen aus zwei Akten. Im ersten (dem 1.-6. Kapitel) bleibt Lotte stets auf der Bühne, und einige Personen besuchen sie, während nach dem 7. Kapitel Goethe selbst zur Hauptperson wird. Die erste Hälfte setzt sich hauptsächlich aus den Dialogen zwischen Lotte und den Besuchern zusammen, in denen der Dichter seine Ansicht über allerlei Dinge darlegt.
- (5) In dem Roman taucht der i. M. meiner Meinung nach zum ersten Mal zu Beginn des zweiten Kapitels auf: d.h. die ersten 30 Zeilen können wir in vier Passagen teilen, deren zweite ein Beispiel des i. M.s und die dritte eine erlebte Rede ausmacht.
- (6) Das 7. ist fast gänzlich das Kapitel von Goethes i. M., und hier macht Th. Mann sein Goethe-Bild klar.